日刊工業新聞
年月日 18 10 17
ページ 15
NO.

挑戦する企業

和魂洋才 世界のリーダーへ

武田薬品工業 ⑪

変化に挑む最前線のMR

専門性・社内連携を両立

1つの転換点

「専門性の高い疾患では、専門医のところに患者さんが局在する。かつ、日本は欧米に比べるとバイオ医薬品がまだそれほど浸透していない。このような事業環境に対応していく」。武田薬品工業スペシャルティビジネスユニット（SPBU）ヘッドの中村浩己は、SPBU立ち上げの意義をこう語る。

武田は4月、国内医療用医薬品事業の体制を刷新。主に生活習慣病治療薬を扱うジェネラルメディスンビジネスユニット（GMBU）と、専門性の高い製品を扱うSPBUを新設した。高血圧薬や糖尿病薬などを国内での主力としてきた武田にとって、SPBU発足は一つの転換点と言える。

現在、SPBUが扱っているのは、7月に製造販売承認を取得した潰瘍性大腸炎治療薬「エンタイビオ」（海外製品名エンティビオ）。潰瘍性大腸炎は、消化管に原因不明の炎症を起こす慢性疾患である炎症性腸疾患（IBD）の一種だ。未解明の部分が多い疾病では、「患者さん一人ひとりの必要とする治療や困りごとが違う。当然、医薬情報担当者（MR）には非常に深い専門知識が必要となる」（中村）。エンタイビオは生物由来のバイオ医薬品であり、武田が多く手がけてきた低分子医薬品と異なるという特徴もある。だが中村は「4―6月の3カ月間、集中的にMRの訓練を行った。医療関係者と中身の濃い議論ができる」と胸を張る。

全体を考える

一般的に言って役割分担や専門性を重視した組織体制は、各社員の視野が狭くなるリスクもはらむ。しかし武田では「GMBUのMRが担当外の製品について何か話を聞いた場合、担当BUのMRにすぐ伝えるような仕組みがある。一見、組織が違っていても、まるで同じ組織のように動けるのが強みだ」（GMBUヘッドの大中康博）。

各社員の連携強化で営業活動の効率化が求められる（イメージ）▲

大中によると、武田のMRは「そもそも、それぞれの担当だけの視点で考える人が本当に少ない。例えば国や地区、もしくは会社全体のためにどうしよう、と考える文化がある」。高い士気と専門性を保ちつつ、全体最適を実現できるか。大中や中村のバランス感覚が問われ続ける。（敬称略）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社